

令和 4 年 5 月 1 日現在

機関番号：21601
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2018～2021
 課題番号：18K02766
 研究課題名(和文) 通常の学級に在籍する児童への作業療法士のコンサルテーション・モデルの実証的研究

 研究課題名(英文) Empirical research of of the consultation model by occupational therapist for children in a regular classroom.

 研究代表者
 倉澤 茂樹 (Kurasawa, Shigeki)

 福島県立医科大学・保健科学部・教授

 研究者番号：40517025
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究1「不器用さを呈する学習障害児への作業療法士による学校コンサルテーション」通常の学級に在籍する不器用さを呈する学習障害児に対して作業療法士(以下、OT)が約6ヶ月間に亘り7回学校を訪問し、保護者および教職員にコンサルテーションを実施した。結果、文字の読み書きが習得され、教科学習に対する動機の上向も認められた。
 研究2「問題行動を呈する児童への作業療法士による学校コンサルテーション」普通学級に在籍する問題行動を呈する児童に対してOTが約1年に亘り10回、保護者・教職員にコンサルテーションを実施した。結果、規則違反の行動、注意の問題などの問題行動が減少し、課題に取り組む頻度も改善した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 通常学級における作業療法士の連携・協働に関する研究は国際的にも乏しい。本研究は我々が開発したコンサルテーション・モデルを活用し、有用性・実行可能性を検討するものである。既に原著論文として2編発表しており、学校教育における教職員と作業療法士の新たな連携・協働へとつながる可能性が期待できる。さらに本知見は、発達分野に携わる作業療法士の育成にも貢献できると考える。

研究成果の概要(英文)：Research 1[School consultation by an occupational therapist for a child presenting clumsiness and learning disabilities.]The occupational therapist (OT) visited the school seven times over a period of approximately 6 months, and consulted with either the teaching staff or parents. By adopting teaching methods that made the most of the child's individual qualities and devising easy-to-write teaching materials, the child learned how to read and write while improving his motivation toward the course work.
 Research 2[Consultation at school by occupational therapists for students with problem behaviors.] The OT consulted with parents and teachers 10 times over a year for students with problem behaviors who is a student in the regular class. As a result, problem behaviors such as rule-breaking behavior, attention problems, and thought problems were reduced. In addition, the time spent in the classroom increased, and the frequency of working on tasks improved.

研究分野：作業療法

キーワード：作業療法 特別支援教育 小学校 発達障害 コンサルテーション

1. 研究開始当初の背景

文部科学省による「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査(平成24年)」では、知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童(小学生)は7.3~8.1%と報告している。発達障害や精神・神経疾患を有する児童は特別支援学校・学級で指導を受けていることが想定される現状において、この調査結果は、発達障害のある児童生徒の未診断を反映していると考えられる。したがって、教職員の専門性向上のためのシステム構築が求められており、外部専門家との連携・協業の推進が期待されている。

一方、発達分野の作業療法士(以下、OT)、日常生活における様々な活動をライフステージ通じて支援している。例えば、認知特性により更衣が出来ない就学前の自閉スペクトラム症児にはスモールステップによるチェイニング(連鎖化)や視覚支援を用い生活技能の獲得を図る。不器用を呈する就学期の発達性協調運動症の児童においては、書字動作訓練や目と手の協応動作訓練、自助具の活用など環境調整を行っている。支援の理論的基盤は感覚統合理論、応用行動分析学、代償学や環境整備論など多岐にわたる。

我々は先行研究においてOTによる学校コンサルテーション・モデルのプロトコール完成に至っている。OTは特別支援学校など特別支援教育における活動実績を積みつつある。しかしながら、通常学級に対する調査研究は国内外を通じて乏しいのが現状である。

2. 研究の目的

本研究は通常の学級に在籍する学習または行動に困難さを示す児童に対して、我々が開発したOTによるコンサルテーション・モデルを実践し、その有用性を検証することを目的とする。

3. 研究の方法

研究協力校の教職員より、対象児童および保護者等に対し書面を提示しながら口頭(あるいは電話)にて本研究の概要を説明する。研究参加の意思表示がされた後、同意書に記名(児童および保護者等)していただく。その後、手渡しあるいは郵送により評価質問紙による情報収集を行う。収集する情報は、対象児童の基本属性(年齢、性別など)、日本版感覚プロファイル:保護者用(感覚処理の特性)、日本版感覚プロファイル、子供の行動チェックリスト(保護者用:CBCL・教師用:TRF)である。調整後、OTによるコンサルテーションを開始する。コンサルテーションの期間は初回訪問時から半年~1年とし、頻度は月1回程度を予定している。初回訪問時に評価質問紙を確認し、対象児を観察評価する。さらに対象児(必要に応じて保護者等)と面接し、解決すべき課題を設定する。設定した課題に対し、OTが観察した評価・見立てを教職員(必要に応じて保護者等)に説明し、個別的な支援方法を助言する。OTによるコンサルテーション終了後にCBCLとTRFを用いて効果を行う。

4. 研究成果

研究1「不器用さを呈する学習障害児への作業療法士による学校コンサルテーション」

通常の学級に在籍する不器用さを呈する学習障害児に対して作業療法士(以下、OT)が約6ヶ月間に亘り7回学校を訪問し、保護者および教職員にコンサルテーションを実施した(表1参照)。保護者および教員の主訴に対し、OTは特性要因図を用い本児の状況を説明し、OTが提案する支援方法について理解を得た(図1参照)。

結果、対象児の特性を生かした教授方法や書字しやすい教材を工夫したことによって、文字の読み書きが習得され、教科学習に対する動機の上向も認められた。家庭での問題行動はペアレント・トレーニングを実施したことで減少した。

研究2「問題行動を呈する児童への作業療法士による学校コンサルテーション」

普通学級に在籍する問題行動を呈する児童に対して作業療法士(以下、OT)が約1年に亘り10回、保護者・教職員にコンサルテーションを実施した(表2参照)。

保護者・教職員の主訴に対し、OTは特性要因図を用い本児の状況を説明し、焦点化すべき目標を協議した(図2参照)。さらにOTは問題行動を応用行動分析学的アプローチに基づいて機能分析を行い、具体的な対処方法を助言した。結果、学校生活において、規則違反的行動、注意の問題、思考の問題などの問題行動が減少した。攻撃的行動は言語による抵抗や拒否は残存していたが、暴力行為はほぼ認められなくなった。さらに教室内で過ごせる時間も増加し、課題に取り組む頻度も改善した(図3参照)。

表1. OTによる学校コンサルテーションの流れ(概要)

回目	時期	対象者			OTによる学校コンサルテーション		
		校長	担当教諭	支援学級 母親 父親 学童 担当	時間	経過および概要	主な助言や調整した事項
	2018年 10月上旬					校長より学校コンサルテーションを依頼される。研究説明書および同意書、検査要旨等の関係書類を送付する。	
1	10月中旬				午前 約3時間	OTによる学校訪問。同意書による研究参加の意思を確認。検査用紙の引き取り、校長及び担当教諭との面接、OTによる授業観察と臨床評価を実施する。	
2	11月上旬				放課後 約2時間	母親および担当教諭・支援学級の教諭と面談する。OTの助言を受け、母親は支援学級への一部合流と専門機関での受診を決定される。	<ul style="list-style-type: none"> ・特性関連図を用いた説明 ・ペアレントトレーニング ・ティーチャーズトレーニング
3	12月中旬				放課後 約2時間	両親および担当教諭・支援学校の教諭と面談する。支援学級での学習方法や悪ふざけへの対応など支援計画を見直す。	<ul style="list-style-type: none"> ・4種類の読み方の検討 ・文字の覚え方の検討 ・凹凸書字教材シートの活用
4	2019年 1月上旬				学童 約2時間	併設されている学童保育の様子を観察・評価する。その場で気づいた点は助言し、詳細は後日説明することとした。	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員への疾病教育 ・特性関連図を用いた説明 ・ティーチャーズトレーニング
5	1月中旬				午後 学童前 約2時間	学童保育の先生、発達障害への理解と対応について講習会およびAくんへの対応について協議する。	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚支援 ・食材とお箸の工夫 ・スモールステップ(宿題を減らす)
	2月中旬					担当教諭と電話にて情報交換する。3月に効果判定のための検査と聞き取り調査を行うことを確認する。	
6	3月中旬				放課後 約2時間	担当教諭および支援学校の教諭と面談。改善点と残された課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の覚え方を一緒に考える ・宿題を減らし、漢字の覚え方を宿題とする
	4月下旬					母親と電話にて情報交換する。専門機関で正式に学習障害と診断されたとのこと。担当教諭が変更したこともあり、申し送りを希望される。	
7	5月下旬				午後 学童前 約2時間	OTによる学校訪問。新年度担当教諭への申し送りと支援学級での学習状況と学童保育の様子を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・新任教員への特性関連図を用いた説明 ・文字の覚え方等、支援方法の再確認

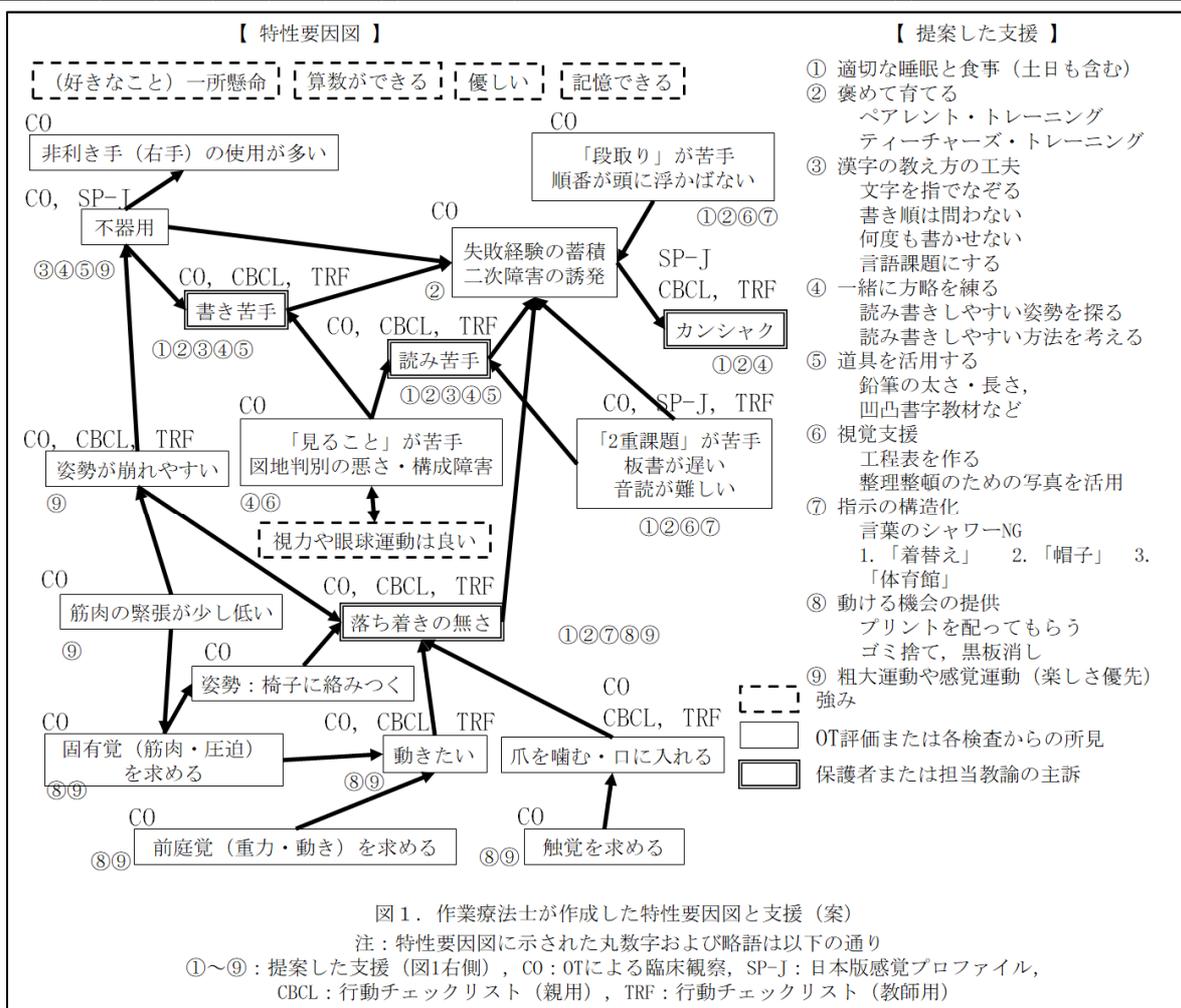
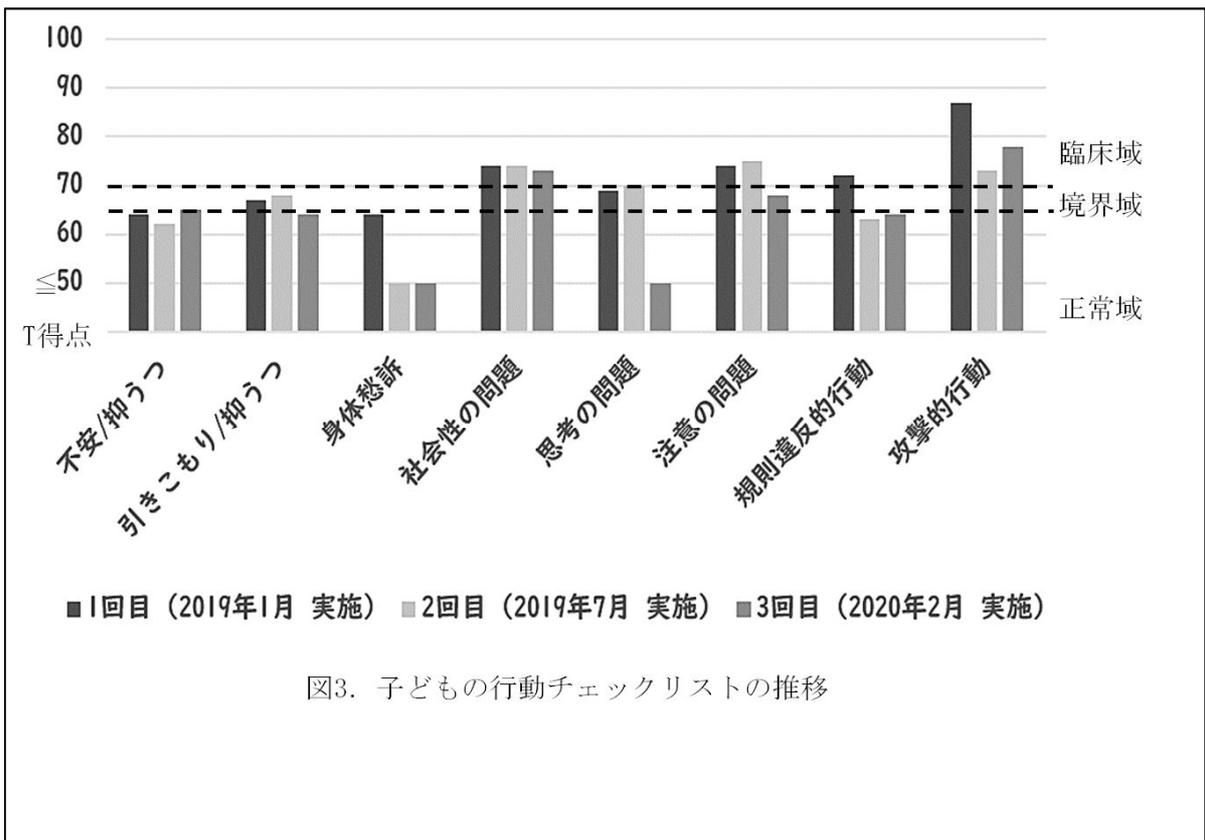
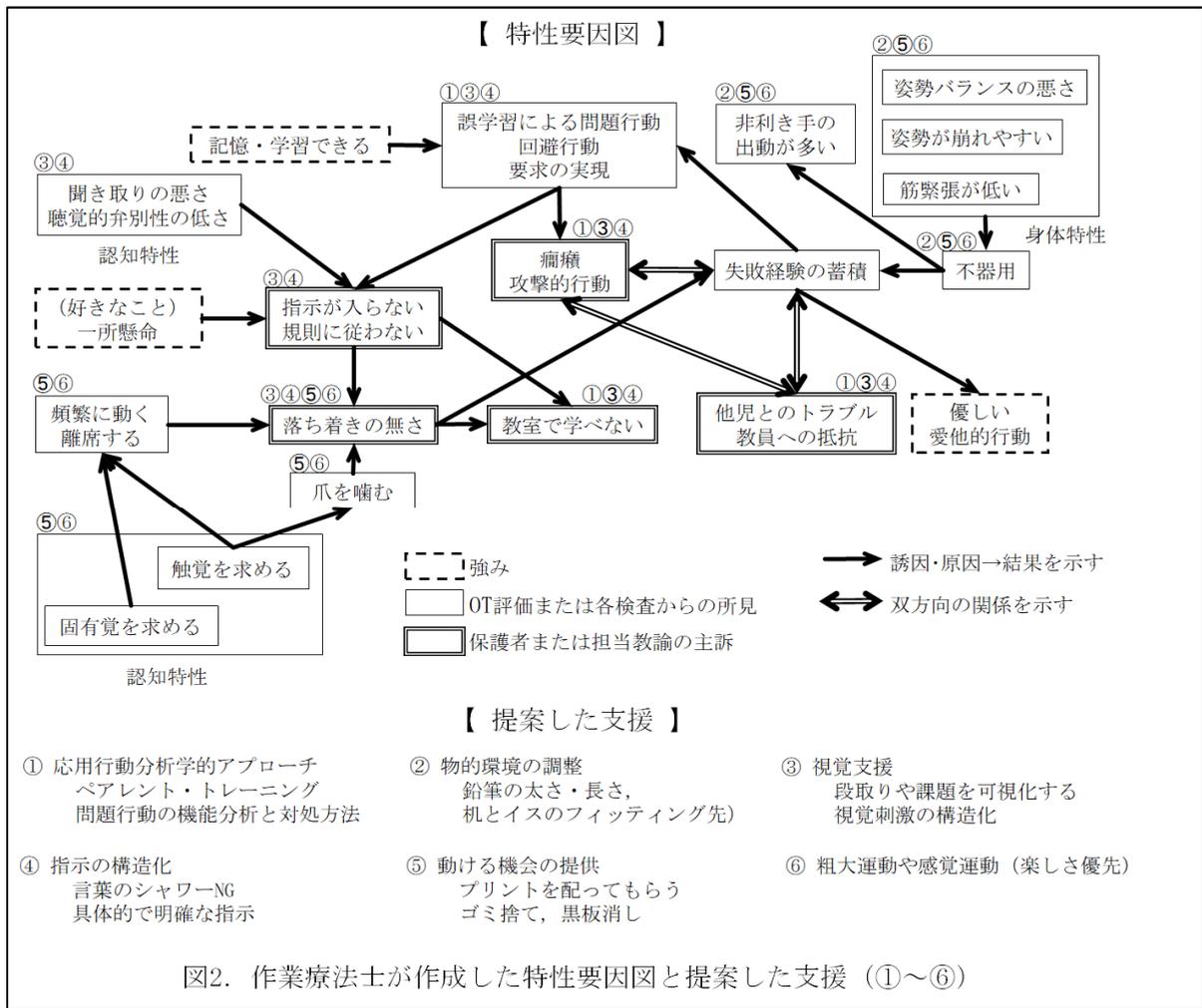


表2. OTによる学校コンサルテーションの流れ(概要)

回目	時期	対象者					OTによる学校コンサルテーション		
		校長 教頭	担当 教諭	加配 学級 教員	支援 学級 教諭	他の 教職員	母親	時間	経過および概要
【コンサルテーション開始までの準備】									
	2018年 12月上旬							校長より学校コンサルテーションを依頼される。研究説明書および同意書、検査要旨等の関係書類を送付する。	
	2019年 1月中旬						午前 約3時間	OTによる学校訪問。同意書による研究参加の意思を確認。検査用紙の引き取り、校長及び担当教諭との面接、OTによる授業観察と臨床評価を実施する。	
【他児とのトラブル、教職員への暴言・暴力を減らすことを目標とした時期】									
1	1月下旬						放課後 約2時間	ニーズの優先順位を検討し、「 他児とのトラブル、教職員への暴言・暴力を減らすこと 」に当面の目標を決定する。	<ul style="list-style-type: none"> ・特性要因図を用いた説明 ・応用行動分析(先行介入、正の強化、プロンプト) 例「加配教員を蹴る行動への対応を助言」 ・視覚支援 ・指示の構造化
2	2月中旬						放課後 約2時間	母親の困り感を聞き取る。児の行動と背景を説明する。物的環境の調整提案：図書館や相談室での学習は了承されるが、 支援学級への合流には消極的 だった。	<ul style="list-style-type: none"> ・特性要因図を用いた説明 ・応用行動分析(正の強化、プロンプト、代替行動分化強化) 例「給食の配膳時に割り込む行動を分析し対応を助言」 ・物的環境の調整(道具やイス) ・視覚支援 ・指示の構造化 ・動ける機会の提供 ・粗大運動や感覚運動
							放課後 約1時間	母親との面談で確認した支援内容を伝達する。他児とのトラブルは減少しているが、 加配の教員への暴力は継続 していた。	
3	2月下旬						午後 約3時間	観察：児と加配教員の関係性は以前よりよくなっている。観察後に 具体的な関わり方を助言 した。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 褒めて、信頼関係を構築する 消去 スモールステップ
4	3月上旬						放課後 約2時間	相談室で加配の教員とのやり取りを観察した後、加配の教員と面談し、 具体的な関わり方を助言 した。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 褒めて、信頼関係を構築する 先行刺激操作で攻撃的行動を予防する 行動契約
【新任の担当教諭への申し送りと支援学級の一部合流を目指した時期】									
5	4月上旬						午後 約2時間	研修会 を通じ、ASDやDCDなどの障害について概説し、その特性に応じた基本的な対処方法を説明した。また、 対象児について特性要因図を用い説明し、協力を求めた 。	<ul style="list-style-type: none"> ・特性要因図を用いた説明 ・応用行動分析(メリットの法則、正の強化、消去) ・視覚支援 ・指示の構造化
6	4月下旬						午後 約3時間	授業を観察した後、支援学級の利用について協議した。後日、母親との面談を設定し、OTより支援学級への一部合流を提案することを確認した。	<ul style="list-style-type: none"> ・特性要因図を用いた説明 ・応用行動分析(メリットの法則、正の強化、消去) 例「教室にいる時、教室に戻ったときの対応を助言」
7	5月中旬						放課後 約2時間	教室に入れるようになったことを喜ばれるが、学習ができていない現状を心配され、 一部の教科について支援学級の利用を了承 される。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析(褒める、正の強化) ・支援学級の利用
							放課後 約1時間	母親との面談で確認した事項を伝達する。他児とのトラブルが減少したため、今後は 教室で過ごす時間を増やすことを目的 とした。また、2カ月後にコンサルテーションの成果を確認するために最終評価を行い面談も設定することとした。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 褒めて、信頼関係を構築する メリットの法則 行動契約 ・支援学級の利用
8	7月下旬						放課後 約1時間	他児とのトラブルがなくなったことに感謝されるが、教室にいる時間が減っており、学習の遅れを心配される。 支援学級の利用を続ける ことを確認した。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 褒めて、信頼関係を構築する メリットの法則 ・支援学級の利用の促進
							放課後 約1時間	他児とのトラブルはほとんど無くなったが、 教室(普通教室・支援学級)に4割ほどしかおらず、校内を徘徊し教職員や他児と関わっている とのこと。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 褒めて、信頼関係を構築する メリットの法則 先行介入、行動契約
							放課後 約1時間	授業以外での対象児への関わり方について統一 するよう協力を求め、学校コンサルテーションを終了することを確認した。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 メリットの法則(消去で行動を減らす) プロンプトして教室に入ることを促す
	8月下旬						電話 30分	学校コンサルテーションの継続を希望 されたため了承した。	<ul style="list-style-type: none"> ・教室にいる時間を記録する
【校内徘徊を減らし、教室で過ごす時間を増やすことを目標とした時期】									
							放課後 約1時間	教室にいる時間がほとんどなく、支援学級でも良いので教室で学んでほしいと切望される。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析(褒める、正の強化) ・支援学級の利用の促進
9	9月下旬						放課後 約1時間	他児とのトラブルはほとんど無くなった。しかし、朝の会や大好きなプールの授業を除いて 保健室や校内を歩き回り遊んでいる 。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 褒めて、信頼関係を構築する メリットの法則
							放課後 約1時間	授業以外での対象児への関わり方について統一するよう協力を求めた。その後、 養護教諭と面談し、保健室での関わり方の修正 を促した。	<ul style="list-style-type: none"> ・応用行動分析 メリットの法則(消去で行動を減らす) 保健室にいることを強化しない プロンプトして教室に入ることを促す
	11月下旬						電話 30分	普通教室で2割、支援学級で7割程度過ごす 。時々、校内を徘徊し保健室に行くが長居しない。	<ul style="list-style-type: none"> ・電話によるモニタリング継続の確認
	2020年 1月下旬						電話 30分	普通教室で2割、支援学級で8割程度で過ごす。 校内徘徊はほとんどない 。	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問日の設定
10	2月下旬						午後 学童前 約2時間	決められた時間に 普通教室や支援学級で学ぶ ことが出来ている。時々、他児との言い争いはある。取り組む学習内容によって意欲にムラがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・目標を授業の参加率を上げることに修正 ・応用行動分析 ・視覚支援 ・指示の構造化



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 倉澤茂樹、立山清美、丹葉寛之、中岡和代、大歳太郎	4. 巻 39
2. 論文標題 不器用さを呈する学習障害児への作業療法士による学校コンサルテーション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 605-615
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32178/jotr.39.5_605	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 倉澤茂樹、立山清美、塩津裕康、中岡和代、大歳太郎	4. 巻 40
2. 論文標題 問題行動を呈する児童への作業療法士による学校コンサルテーション	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 359-369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32178/jotr.40.3_359	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 倉澤茂樹、塩津裕康
2. 発表標題 不器用さを呈する学習障害児への作業療法士による学校コンサルテーション：事例報告
3. 学会等名 第3回 日本DCD学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丹葉 寛之 (Tanba Hiroyuki) (30531652)	藍野大学・公私立大学の部局等・講師 (34441)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大歳 太郎 (Ohtoshi Taro) (40336483)	関西医療大学・保健医療学部・教授 (34438)	
研究分担者	立山 清美 (Kiyomi Tateyama) (70290385)	大阪府立大学・総合リハビリテーション学研究科・准教授 (24403)	
研究分担者	中岡 和代 (Nakaoka Kazuyo) (90708017)	大阪府立大学・総合リハビリテーション学研究科・助教 (24403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関